

マカオ新教徒墓地に眠る日本物語

A Japan Narrative Interred in the Old Protestant Cemetery of Macau

宮澤 眞一

MIYAZAWA Shinichi

Almost immediately following the Portuguese formation of Macau in the mid-sixteenth century, Japan and her people have since had much to do with the Macaunese life and history. This paper examines one of the most incidental and that much unknown aspects of the Japanese long-standing connection with Macau, focusing on some of the interred European protestants' tomb stone inscriptions.

キリシタン迫害と日本人墓
マカオ新教徒墓地形成の背景
ロバート・モリソンの役割
マカオ史から見る顕著な墓碑
日本開国以前の日本物語
ペリー提督来日に係わる墓碑

注

Appendix 1. The Memorials in Plan after Teixeira

Appendix 2. Account Statement dated Macao 30 June 1840, of Jardine Matheson & Co. to Dr. Hollingworth Magniac (private collection)

はじめに

I seldom go out, but when I feel myself flagging I go and cheer myself up in Pere Lachaise. While seeking out the dead I see nothing but the living. Balzac

15 世紀末までに喜望峰を經由し、印度のゴアに達したポルトガル人航海者たちのその後の足取りは迅速であった。1511 年にシンガポールに近いマラッカを手中に収めると、1517 年、Tome Pires の率いるポルトガル使節は、広東城に侵入した勢いに乗じて北京まで上っていく。多少誇張したロマンスの形でまとめられているとしても、ピント（Fernao Mendes Pinto）の自伝的冒険談は、マカオ形成以前にこうして急速に北上するポルトガル人の前線基地の散在を語り伝えている。ピント自身もその一つ寧波の居留地を訪れ、その後、三度の日本渡航に成功しているという。

西洋から東洋の岸边にむかって打ち寄せる国際交流の波は、15 世紀半ばから 16 世紀半ばにかけての 100 年間に急激に進んだばかりか、他方、同じころ日本発進の国際交流の波もまた、アジアの各地にむかって進行した。カー（George H. Kerr）はその著書 OKINAWA-THE HISTORY OF AN ISLAND PEOPLE（Rev. Ed., 2000, Charles Tuttle）においてこう述べている。「15 世紀以前の貿易について詳細は分かっていないが、1432 年から 1570 年の間に少なくとも 44 回の正式使節が、アンナン、シャイヤム、パターニ、マラッカをはじめ、ジャワ島の小王国にまで派遣された」（上掲載書 p.91）。

海路による東西交流、それも最初期の主役を演じたポルトガル人による東西交流の場は、ゴア、マラッカ、パターニ、泉州や寧波につづき、1550 年代には前線基地をマカオに集約させることになる。本稿では東西交流の場としてのマカオの役割のなかで、日本との関わりに焦点を当てる、それもマカオに残る日本関係の墓石に二つの種類があることに注目した。墓石は身近に歴史を感じさせ、今と昔の一体感に立った歴史通信を可能にさせる。最初の墓石は、キリシタン弾圧を逃れてのちマカオで他界した日本人カトリック信者のものである。これらの墓石の語りかける歴史通信をここでは「日本物語」と呼んでみたい。もう一つのタイプは、ここでは「日本物語」と呼ぶが、幕末日本の開国に係わって客死しマカオに埋葬された欧米人プロテスタント信徒の墓石が語り伝える歴史通信である。

本稿は科研費の補助を得て、三年間にわたって解読・活字化に努めたアーネスト・サトウ自筆日記研究の小さな一角、いわば研究余祿として発表するものである。二回のマカオ

墓石探訪のなかで、アーネスト・サトウ研究に欠かせない東西交流の視点を把握できたことでは、筆者にとっては貴重な体験になったことを記して感謝したい。

本文中丸括弧のなかの数字は、新教徒墓地の墓石登録番号を示すが、Appendix に掲載する墓地図面中の番号に対応する。

キリシタン迫害と日本人墓

マカオ文化と歴史の研究機関である INSTITUO CULTURAL DE MACAU は、英文機関誌の特集号を組み、マカオと日本との関係史を取り上げたことがある（注 1）。なかでも執筆当時、現地に在住するマカオ史研究の第一人者であった Manuel Teixeira 神父による論文「マカオの日本人」（注 2）は、同じ団体から先行して発行されたことのある同師の小冊子（注 3）に訂正を一部加えた再録にあたり、本稿テーマとの関連において興味深い概観が見られるので、ここでは最初に典拠として使用する。

1602-3 年に始まった St. Paules 大聖堂の再建に、日本人が係わったことが述べられている。日本交易の生み出す莫大な利益を建築費にあてたばかりでなく、Giovanni Nicola 神父率いるイエズス会信徒の工芸職人が、多数日本から渡来して石工や木工の工事に従事した、と Teixeira 神父はその痕跡を指摘する。さらに、その後十七世紀初頭に続々と、キリシタン弾圧を恐れマカオ入りした日本人男女へと言及を進めていく（注 4）。日本人信者にとって縁ふかいこの聖パウロ大聖堂は、十八世紀になるとイエズス会のマカオ撤退に伴い放置されてしまい、その後は軍用施設等として使われるなどしている間に、台所からの出火が原因でほぼ全壊してしまう運命にあった。今日では 1990 年代に復興されて、facade に附属する博物館施設が、マカオ観光の筆頭名所に数えられるほどに人気を回復している。

キリシタン職人のほかにも、十七世紀にマカオに定住の地を求めて渡来し、やがてこの大聖堂内に埋葬されることになった日本人信者多数のうち、十名余りの名前を Teixeira 神父はあげている。Toba Maria Bicuni はその一人である。イエス側廊の祭壇寄りに埋葬されるものの、死亡の年月日は分らない。詳細が判明しているもののなかには、やはり女性キリシタンの Regina Pereira（1648 年 11 月死亡）や Monica Pires（1687 年 1 月 17 日死亡）の名前が知られている（注 5）。最後のモニカなどは、日本から避難した信者

のなかでも、最高齢に達した一人と思われる。そこで次のような想像をしたくなる。1685 年 3 月 10 日にマカオ沖の Dom Joan Island で難破した伊勢の和船乗組員、Tarobe 等とのコミュニケーションのために、通訳に駆り出された日本人老女がいたというが、モニカはその老女本人であるかも知れないのである。「すっかり日本語を忘れてしまっていたが、彼女は、段々に、彼らの話を理解できるようになった」と伝えられている（注 6）。

1614 年 1 月 27 日に発布された徳川幕府によるキリシタン禁制のもとで、前出の芸術家神父 Nicola に伴われマカオに逃れた弟子たちの中でも、一年の在住に満たない翌年 1 月 20 日に他界してしまう Mancio Taichiku は、聖パウロ大聖堂に埋葬されたと記録に残る最初期の日本人死者の一例であろう（注 7）。キリシタンの避難先はマカオに限定されていない。マニラにはすでに 1592 年の時点で三百人の日本人が居留していたと言われ、キリシタン弾圧の強化とともに、南方の島々に安住の地を求めて渡来する日本人信者の数は増加する一方であった。マニラだけでも 1606 年に一千五百人、1628 年には三千人に達する勢いとなっただろう。1592 年に形成された日本人街 Dilao に続き、1615 年には San Miguel という名のもう一つの日本人街が追加されたほどである（注 8）。

同様のキリシタン難民の現象は、マカオやマニラにとどまらず、マラッカやシャイアムにまで広がっていた。マカオ在住の日本人信者の方は、小半島の地域的な狭さから言って、マニラほどの人数に達していたとは思われないが、こうして概観して見てくるとき、後述する新教徒墓地の形成に先立つことほぼ二百年も前から、マカオ市内に点在するあちこちのカトリック教会の内部や隣接する墓地に、日系人が眠っていたことが分かる。

1636 年に避難してきた最小年組のキリシタンの血筋を受け、1668 年 3 月 8 日にマカオで誕生した John Pacheco などは、マカオの聖イグナティウス神学校を卒業して神父となり、1725 年 4 月 4 日に他界している。十八世紀初頭に起きた「日本人物語」の異変である。こうして見てくるとき、聖パウロ大聖堂に埋葬された日系人の流れは、思いがけず日本鎖国時代の遙か後年に至るまで脈々と続き（注 9）、「日本人物語」を語りついできたようである。マカオのカトリック教会に日系人が埋葬されているのに対して、これから述べる主として英国系のプロテスタント墓地に、日本人の埋葬者は皆無である。

マカオ新教徒墓地形成の背景

ポルトガル系のカトリック信者によって十六世紀中葉から鋭意築かれてきた小さな極東の街と呼んでよいマカオは、対中国貿易のほぼ唯一の交易地の役割を演じた広東の川下に位置している。10 月から翌年 3 月までの交易期間を広東の各国商館で過ごしたあとは、次の交易期間が始まるまでの半年間を川下のマカオで待機する。家族的な休暇を楽しめる絶好の避暑地としてマカオは発達した。女王エリザベス一世によって下された 1599 年末の勅許に起源する英国東印度会社は、初期の対中国交易活動をアモイなど中国沿岸各地に展開し、やがて平戸英国商館の設置など日本にまで交易の足場を伸ばすものの、十七世紀末にこの広東・マカオ構造に極東交易の場を集約させている（注 10）。

1602 年創設の蘭国東印度会社は、1729 年に広東での交易を許される。また、独立戦争後の米国からは、1784 年の *Empress of China* 号が最初の米国商船としてマカオに入港するなど（注 11）、時代の波に乗った欧米のプロテスタント商人たちが、マカオというカトリック信者の街に次々に登場することとなった。

広東・マカオ構造のなかに彼ら新来者が進出を果たすには、中国政府とポルトガル系マカオ政庁の双方から、妨害工作を予期せねばならず、実際に、容易に実現したものではない。ポルトガル政府との間に、まず母国政府が合意書を交わし、いわば国策会社のような恰好で各国の東印度会社が進出するのならまだしも、民間の冒険商人たちが、この構造に潜入するのは困難を極めた。多くの場合、欧米の小国から在広東領事という肩書を得て、東印度会社とは違う意味ではあっても、同様に半ば外国政府の代表機関であるかのような権威を具備した「商人領事」という隠れ蓑が、盛んに利用されたわけである。

英国系冒険商人のそうした商人領事の一例をここで見ておきたい。代表格は、Daniel Beale と Thomas Beale 兄弟、それに Charles Magniac を加えたトリオによる民間商社 Beale, Magniac & Co. である。三人の間で在広東プロシア領事を盪まわしにする傍ら、英国東印度会社に代行するかたちで、アヘン貿易にも従事していた。トリオのうち弟 Thomas Beale (Grave No. 159)、それに兄 Daniel Beale と同姓同名の息子 Daniel Beale Junior (Grave No. 160)、彼ら二人の墓碑が新教徒墓地に残っている。また、1825 年にはトリオ最後の商人領事 Charles Magniac が、英国人医師 William Jardine にアヘン貿易の権利を売って引退・帰国するが、このジャーディンも商人領事の資格を得ている。それは在広東デンマーク領事であった James Matheson と 1827 年に共同経営の商

社を起こしたときに、マセソンの領事職を受け継いだためである（注 11）。

ジャーディン・マセソン商会は、1859 年 7 月 1 日開港の横浜に先陣を切って乗り込み、一等地といえる角地に横浜英一番館を構えるほどに、すでに対中国貿易で巨利を集積していた。その始まりがマカオと広東にあった。また、英国東印度会社による中国貿易の独占体制を破るには、広東・マカオ構造のなかに常用されていた商人領事という隠れ蓑も、アヘン商人には不可欠の手段と考えられていたわけである。

ロバート・モリソンの役割

一定の地域に居留して community を形成していれば、他界する親族や隣人に対する適切な葬儀と埋葬がいつか必要になる。中国領土の一角にいわば「居座り組」（注 12）として足場を固め先住してきたポルトガル系カトリック信者、また強圧的な姿勢を崩さない中国政府役人の不断の監視、それに加えて英国東印度会社の英国王室・政府・国教会との関わり、これら三者の軋轢がふくざつに絡み合うなかにあつて（注 13）、英国系プロテスタントのマカオ生活は、生前はもとより死後にいたるまで窮地にあつたと言えるであろう。

マカオ史に多大な足跡を残した英国系プロテスタント信徒の第一人者といえ、モリソン（Robert Morrison: Grave No. 141）をおいて他にない。本稿のテーマにあるマカオ新教徒墓地の形成自体、モリソンの妻 Mary の死が契機となって実現したものである。それに、墓地入口に建つ礼拝堂は、さまざまな名称の変遷のあと、今日までに The Morrison Chapel という一般的な呼称に定着するほど（注 14）、マカオ生活におけるモリソン存在の意義は甚大である。日本ではロバート・モリソンの名前は、もっぱらモリソン号事件で広く知られている。戦後まもなく英米の外交文書を中心に探索し、この事件について子細に総合的に検討して、日本におけるほぼ唯一の研究資料といえるものを残した相原良一が、『天保八年 米船モリソン号渡来の研究』のなかで述べた次のような一節がある。

「ロバート・モリソンは言ふまでもなく中国に於ける最初の新教宣教者であつて、一八三四年死亡するまで最も有力な宣教師であると同時に有名な中国学者であつた。後に述べる如くモリソン号が日本へ渡来し、撃攘された際、高野長英、渡辺華山等所謂蛮社の人々が船名を誤って『近世希世の豪傑モリソン』としたその人

物であるが、同師が英国より派遣せられ広東に赴任するに当たって東印度会社の船によらずして、一旦アメリカへ渡り、ニューヨーク及びフィラデルフィアの新教関係者の世話で広東に来たことから考えて、後に広東で布教を開始したブリッジマンを始めとするアメリカ海外宣教団の人々と密接な協力を保ったであろうことは容易に察せられる所である」(注15)

海外伝道を目的として英国系プロテスタントの会派によって設立された The London Missionary Society が、中国伝道のために宣教師や医師を派遣したくとも、十九世紀の初頭に名乗りをあげる若々しい英国人は皆無の状態にあった。モリソンはその一号であり、また単独渡航となった。宣教師本部に宛てた中国到着を知らせる第一報には、広東 1807 年 7 月 7 日の日付がついている。上掲書で相原良一が触れているように、広東の米国商館を最初の滞在先を選んだ。英国東印度会社の妨害を恐れたためである。広東・マカオに在住する同社の関係者全てが、たとえ宗派を異にしても同じ英国人の献身的な信徒の到来に、反感のみを示したわけでない。なかも、同社の通訳翻訳官であった中国学者 Sir George T. Staunton は、同学の士の遠来を歓迎して終始協力を惜しまなかったばかりか、やがて、モリソンは、ストーントン卿の後継者として英国東印度会社に推挙され採用される運びに発展するほどに、両者の関係は親密なものであった。

マカオに在住したいとする英国プロテスタント信徒を取り囲む四面楚歌の状況について、モリソン自身が、ロンドンの本部宛ての 1807 年 9 月 7 日書簡において再び次のように述べている。

Last Friday evening I went on shore at Macao, and unexpectedly found there Sir George T. Staunton and also Mr. Chalmers. I waited on the latter next morning, and presented to him Mr. Cowie's letter of introduction. Mr. Chalmers said he wished me success with his soul, 'but,' added he, 'the people of Europe have no idea of the difficulty of residing here, or obtaining masters to teach.' He then mentioned the circumstances so generally known, that the Chinese are prohibited from teaching the language, and that under the penalty of death. However, he at last said that he would converse with Mr. Roberts, Chief of the English Factory, and also with Sir George. I then waited on Sir George, and presented Sir Joseph Banks' letter. Sir George spoke likewise of the difficulty of the attempt; reminded me that the Company forbade any person to stay but on account of trade, but promised that he would do what was in his power. The residence at Macao is especially

difficult, owing to the jealousy of the Romanish bishop and priests.”（注 16）

この書簡から約三ヶ月経過した 1807 年 11 月 4 日付けの本部宛て書簡においても、同様の障害を述べて三点に絞って指摘しているばかりか、前出の英国系アヘン商社 Beale, Magniac & Co.の庇護を受けてでも、マカオに潜入したいとする構想にまで言及するのである。

They both represented my difficulty in obtaining a residence as very great, on two or three accounts. 1st. The Chinese; 2nd the Portuguese clergy; and, 3rdly, the strict orders of the gentlemen of the Honourable East India Company. I came to Canton full of anxiety, labouring in vain to possess my soul in patience.（注 17）

こうした極度の警戒心は、日常生活の子細な行動にまで現出した模様であり、人目を忍ぶためという意図だけで、中国人に真似た衣食住のスタイルをモリソンに強いた。

His nails at first suffered to grow, that they might be like those of the Chinese. He has a tail (i.e. a tress of hair) of some length, and became an adept with the chop-sticks. He walked about the Hong with a Chinese frock on, and with thick Chinese shoes.（注 18）

生前にこれほど過酷な生活のなかに置かれたマカオ在住プロテスタント信徒たちに、死後においても同様の悲惨な偏見が待ち受けていた。ここでもモリソン一家を具体例にあげてみよう。この一家に次々に訪れる死去と埋葬地を辿ることは、そのままマカオ新教徒墓地の形成の歴史を語ることになるためである。

まず、長男の James Morrison が、マカオで 1811 年 5 月 5 日に死亡した。母親の Mary Morrison (Grave No. 142) の墓石には、その北側面に次のような碑銘が刻まれている。“At the hill called Meeseenbergh JAMES MORRISON, an Infant of ROBERT and MARY MORRISON is interred: He died March 5, 1811.”（注 19）母親の墓石の傍らに据えられている小さな自然石は、ジェームスの最初の墓であるのだろう。1821 年に死亡する母親メアリーの埋葬が契機となり、初めて設置される運びになったこの墓地には、長男ジェームスのように 1821 年以前に死去して他所に一度埋葬されてたプロテスタント信

徒の墓石を、このように寄せ集めたと思われる例がほかにも見い出せる。ジェームスの最初の埋葬地、The Meesenberg Hill とは、マカオ半島の北側に位置する山間にあたり、城壁内の市街地ではなかった。再び断るまでもなく、マカオの城壁内は中国政府の管理下にあるポルトガル系カトリック信者の専用する聖地として考えられていたためである。

マカオに在住する欧米諸国のプロテスタント信徒たちは、城壁の外壁足元か、郊外の丘の斜面に設置された異人墓地に埋葬されるしか、ほかに選択の余地はなかったようである。広東・マカオ構造に潜入した蘭国東印度会社の関係者などは、プロテスタンとの国柄だけあって、早くから自身の墓地確保の必要性を感じ、前出の碑文に見えるドイツ人ミーゼンバーグ (Wilhelm Meesenberg: Grave No. 171) もその関係者の一人であった。この人の埋葬を契機に設置されたと思われる郊外のミーゼンバーグ丘墓地は、現在、マカオ市の市街地拡張計画のために撤去されており、既に触れたように 1821 年新教徒墓地 (The Old Protestant Cemetery) の新設に伴い、ミーゼンバーグやジェームス・モリソンのように同墓地に再埋葬されるか、その後に増設されたもう一つの新教徒墓地 (The New Protestant Cemetery) に移されたものとがある。

1767 年 6 月 6 日に死亡したミーゼンバーグの墓碑は、墓地の外壁に嵌め込むかたちで保存された墓碑登録番号 167-189 の一つである。西洋式墓地の石版墓碑 (headstones or “monumental inscriptions”) (注 20) は、伝統的に平板の片面だけに文字を刻む慣習がある (注 21)。正面ばかりか裏面や、両側面にまで刻み文字を入れる日本墓石の方法とちがいが、ミーゼンバーグ墓碑のように石壁に裏面を張り付けるとか、ロンドンのトラファルガー広場近くの喫茶館のように、床石としてフロアーに並べるなど、いずれにせよ片面だけを固定させることは比較的容易である。

マカオの最初の新教徒用墓地としては、従って、十八世紀後半に新設されたミーゼンバーグ丘墓地 (The Meesenberg Hill Cemetery) がその最初期の一例として見るべきであろう。欧米人の新教徒であれば、国籍や宗派の違いを問わずに、同じ墓地に土葬されたものらしい。英国での伝統的な土葬法について、“5 feet deep”という表現がいまだに残っている位であるから、二百年前のマカオにおける埋葬にあたっても、人間の背丈よりも深い 180 センチもの墓穴を掘り下げたのであろう。同様の土葬方法を福島で見たことがある。神道による古式豊かな葬式であったけれど、これが年樹をまっとうした死者の葬儀であったならば、踊りや鳴りもの入りの伝統的な賑やかさは、実に楽しい別離の饗宴であったはずである。小高い丘の家から延々とつらなる長蛇の列が、山間の急斜面の埋葬地に向かっ

て下っていく様は、天国へ向かうのに相応しい華やかささえ想像させた。ところがこのとき、二十歳前に交通事故で亡くなった女子大生を葬るのに掘られてあった墓穴は、背丈の埋まる深さにあった。

当時マカオに在住していた中国人の埋葬について、付近の「香山県（今珠海市所在）所謂山地埋葬。及后新俗用火化学」（注 22）と伝えられているが、現地中国人と同じ扱い方を受けた。初期の新教徒たちは、古式ゆたかな福島山村の神道葬儀に似て、山地埋葬されたものらしい。

ロバート・モリソン夫人メアリー（Mary Morrison: 1791-1821）は、コレラに罹って 1821 年 6 月 10 日に病死する。夭折した長男ジェームス、1812 年誕生の長女メアリー（Mary Rebecca Morrison）、それに 1814 年生まれの次男ジョン（John Robert Morrison: Grave No. 143）に続いて、このとき夫人は四番目の子供を身ごもっていたと伝えられている。この母子の死去を悲しんだ信心深いモリソンの痛々しい次の言葉が残されている。“a baby which Dr. Morisson mourned, ‘found a grave in its mother’s womb.’”（注 23）

すでに言及したようにモリソン夫人の埋葬が、新教徒墓地新設の契機となったわけであるが、そのプロセスについては Lindsay and Mary Ride をはじめとして、様々な形で解説が試みられてきている（注 24）。ここでは、マカオ通信 1821 年 6 月 12 日の書簡のなかに、モリソン自身が書き残している次の一節を引用しておきたい。異国で客死した妻について、妻の両親（Mr. and Mrs. John Morton）に書き送った死後二日目の悲報である。モリソン伝記作家やマカオ史において、新教徒墓地の新設プロセスに関する叙述の原点となった資料と思われる。

On Monday, I wished to intern Mary out at the hills, where our James was buried; but the Chinese would not let me even open the same grave. I disliked burying under the town walls, but was obliged to resolve to doing so, as the Papists refuse their burying ground to Protestants. The want of a Protestant burying ground has long been felt in Macao, and the present case brought it strongly before the Committee of the English Factory, who immediately resolved to vote a sum sufficient to purchase a piece of ground, worth between three and four thousand dollars; and personally exerted themselves to remove the legal impediments and local difficulties; in which they finally succeeded. This enabled me to lay the remains of my beloved

wife in a place appropriated to the sepulture of Protestant Christians, denied a place of interment by the Romanists. (注 25)

英国東印度会社がここにきて自ら率先し墓地用地の買収に踏み切った背景には、モリソン宣教師に対する敬意の表明がある。モリソンによる聖書の中国語翻訳と英華辞典編集という二つの前人未踏の偉業とともに、同社の正式な通訳翻訳官として協力してきた功績が人々の心を動かす決定要因になったわけである。英国国教会系の英国東印度会社が関わりをもって設置した経緯から、墓地名に付けられた Protestant という名称は広い意味を兼ね備えていたようである。旧教としてのカトリック教会と区別するものであり、英国国教会までも意味合いに含んでいたらしい。また、英国系の純然たるプロテスタント信徒の埋葬に限定することなく、上海公共租界の居住の場合もそうなのであるが、欧米諸国のプロテスタント各派に開放されていた。マカオにおいても時代の潮流は、国際交流・開放を促していたと言える。

メアリーの死後にモリソンは再婚した。この再婚相手が、モリソン伝を二巻本に纏めている。そこに引用された膨大な書簡のうち、メアリーの死を悼んで書いている米国商人オリファント (D.W.C. Olyphant) の書簡の一節を引用しておきたい。オリファントは幕末日本に渡来したローレンス・オリファント (Laurence Oliphant: 1829-1888) とは別人であるし、わずかな家名のスペルの違いに注目しなければならない。米国人のオリファントは、アヘン貿易に一切手を出さないクリスチャン商人として知られ、敬虔な信者として宣教活動を支援するなど、モリソンにとっては最も親しいマカオ住民の一人であった。実際、尊敬するモリソンを記念して、自社の商船に「モリソン号」と命名してみたり、この船を宣教船として提供し、モリソン死後に日本に派遣するなどして、モリソン号事件に間接的に関わりを持つようになった人物である。

Sabbath, June 25, 1821.

My dear Sir,

I received your note of the 19th, with the enclosures confirming the report, which had reached us at Canton, of the affliction which it has pleased our Heavenly Father to visit you in bereaving you of the dearest of earthly comforts. I feel how heavy your loss is, and I sincerely sympathize with you. But as you have taught others, so I trust you now experience it as your privilege to know, that though called to weep, it is not as those who are

ignorant of the truth that 'Jesus hath abolished death.' (注 26)

モリソン礼拝堂から入って直進すると、修道院側の一角にモリソン家の墓地がある。すでに述べたモリソン夫人メアリー、長男ジェームスの他に、ここにはモリソン自身 (Grave No. 141) の墓石と漢文記念碑、それに次男のジョン (John Robert Morrison: Grave No. 143) の墓石と漢文碑文を見ることができる。英国の古い墓地がそうであるように、ここでも墓石の周囲に植え込まれている樹木は、涼しい影をつくっているばかりでなく、墓石の保存にも大いに貢献しているようである。樹木の枝葉を伝わって墓石表面に落ちる水滴には、樹液や葉緑素が含まれているせいか、墓石表面に彫り込まれた文字に、薄緑色の細かな苔が生える。米国作家のナサニエル・ホーソンは、欧米作家に珍しく東洋趣味と思える興味を抱き、刻字に付着した緑の苔を「金モール」と呼んだことがある。実際に、モリソン家の墓石も、緑色の表皮に覆われているから、全体的に長い時間の推移を感じさせないほどの、新鮮な刻字に見えるので判読しやすいものである (注 27)。

マカオ史から見る顕著な墓碑

家族史や地方史の歴史研究に墓地の探索は欠かせない。所変われば品変わると言われるように、各地の墓地を徘徊しているあいだに、宗教や国民性、それに考え方のちがいによって、墓碑という死後の扱い方にさえ、多様性が現出しているのを知って驚くばかりである。日本の墓地はどちらかと言えば画一的に見え、観音像のような個性的な柔らかな微笑を除けば、全体的に装飾的な個性に欠けるように映る。これと対照的に、冒頭に引用したバルザックの感想には、パリの墓地ならではの賑わいを感じさせる。実際、パリの墓地は歴史探索のみならず、散策と瞑想にふさわしい公園の趣を持つ。

Judi Culbertson と Tom Randall の共著 PERMANENT PARISIANS (注 28) は、副題に An Illustrated Guide to the Cemeteries of Paris と付して、これまで接したことのない英単語“necrography”を解説文に使っているほどである。さながら彫刻の森なのである。それもその筈、同書に紹介されている十六箇所の墓地には、どれ一つにも、世界の文化芸術史に残る先人を記念して、思い思いの姿で立つ彫像や個性的な墓碑が並んでいるからである。最初に紹介のある Pere Lachaise 墓地だけでも、音楽家のショパンやロッシェニ、

画家のピサロ、コロー、ユージン・ドラクロア、文学者のバルザック、モリエール、アルフォンス・ドーデー、レミー・ド・グールモン、プルースト、オスカー・ワイルド、ガートルード・スタイン、女優のバーナード、舞踏家のイサドラ・ダンカンを擁している。

墓地公園内を探索・散策しては、木陰のベンチで一休みして、瞑想にふける こうしたバリ風景はマカオ新教徒墓地に見られない。それでも東洋と西洋の最初期の接点であったマカオの長い歴史をふりかえって偲ぶには、かっこの涼しさと静けさを提供している場所であることに相違ないのである。

埋葬記録等の公的な資料にあたりながら、墓石の確認と墓碑の刻字解読を行った調査結果は、これまでに 1940 年の J.M. Braga (注 29)、1963 年の既出 Lindsay Ride 卿 (注 30)、1985 年の既出 Manuel Teixeira (注 31)、1996 年の既出 Linday & Mary Ride (注 32) によって発表されてきた。なかでもライド夫妻による精査の結晶である 1996 年度版は、ほぼ決定版といえる内容であり、墓石の位置・形態・寸法、墓碑文の解読、死者の略伝にいたるまで、長年におよんだ夫妻による丹念な探索結果を網羅した労作となっている。Teixeira 神父の作成した墓地図面をもとにライド夫妻が、1996 年度版に掲載している図面では、旧墓地の墓石と墓碑の総数が、189 基をかぞえる。そのなかに故ライド卿自身の記念碑的なプレート (Grave No. 178: 1977 年香港没) が、墓地保存の功績を讃えるかたちで特別に一基追加されているので、古い時代から受け継いだものは 188 基ということになる。

マカオ新教徒墓地の新設時に合わせ、即座に埋葬されたと推定できるモリソン夫人マリアの墓石、後年に追加されたモリソン自身と次男ジョンの墓石は、三基ともに大理石製のほぼ同形の、石棺様式に作られていて、長さ 197 センチ幅 104 センチの大きな石箱の上に、墓碑銘を刻んだ厚さ 5 センチほどの石版 (table-top) が置かれている。十九世紀前半の慣習的な方法に準拠してか、三人ともに「頭を西に、足を東に向けて」(注 33) 埋葬されている。いつでも立ち上がって朝日を迎えるための姿勢ではない。朝日を背に浴びて、いつなんどきイエス・キリストが復活して光のなかに現れるかも知れず、そんなときに墓地の死者たちがこぞって立ち上がり、イエスに対面して迎えられようようにしておきたい、そんな配慮に起因した慣習のようである。死後にも安眠できるようにと考え、頭寒足熱の日本的習慣からは、死者の北枕が生まれたと、いうものと或る意味で同じことなのだ。

どの墓地にも訪問者や観光客のたえない人気の墓碑があるものである。ここではどうやらモリソン一家がそれにあたるらしい。しかし、ほかにもマカオの歴史と日本と係わり

「日本物語」の故に、訪問者の注目をひくものがいくつかある。墓地見学の目印にもなりそうな堂々たる墓碑もある。次に、それらマカオ史に関連するいくつかの記念碑的な墓石を登録番号順に指摘しておきたい。

チナリー (George Chinnery, 1740-1852: Grave No. 40) (注 34) は、ロンドン生まれの画家であるが、裕福なダブリンの地主の娘と結婚する。妻の醜悪さにたえられず海外に逃亡する。それでも妻の追求の手は緩まず、生涯つづいたという。1825 年 9 月にマカオに渡来してから、モリソンなどの肖像画やマカオの市内風景を得意として描いた。多くの名作を残したばかりか、妻に劣らず醜男であるうえに借金癖が重なり、それでも子供のような純な気持ちを失わなかったから、その変人奇行ぶりゆえに、却って一部の人々の間に信頼され愛された。マカオに在住した芸術家のなかでは、ポルトガル人の Luis Vaz de Camoens (c.1524-1580) (注 35) に匹敵する名声を残している。

歴史家としては Andrew Ljungsteds (1759-1835: Grave No. 60) が労作を残した。もともと 1798 年にスウェーデン東印度会社の商船で渡来して以来、在広東スウェーデン領事を兼務するかたわら、スウェーデン商館長として、人生の大半をマカオで過ごした。長い年月にわたる見聞は、マカオ史の著述となって現れ、近年でも中国語に翻訳されるなど、マカオ史の古典的な評価を受けている (注 36)。モリソン宣教師の数少ない友人の一人でもあった (注 37)。

チャーチル (Lord John Spencer Churchill, 1797-1840: Grave No. 133) は、スペンサー一家の家名に古い一族のもう一つの家名チャーチルを追加したことで知られ、英国貴族の名門に生まれた。1826 年から英国海軍に加わり、1839 年には東印度洋に配備された英国軍艦 Druid 号の艦長となる。中国遠征英国艦隊に加わるために、シドニーを出発して、1840 年 1 月にマカオに寄港した後、6 月 3 日 10 時にマカオ沖合の艦上で病死する。マカオに運ばれた遺体は新教徒墓地に埋葬された (注 38)。名門の人の客死らしく、堂々たる石塔様式の墓石には、スペンサー家とチャーチル家の双方の家紋が彫り込まれているし、南面には次のような刻字が鮮明に読める。

“THE RIGHT HONBLE / LORD H.J. SPENCER CHURCHILL / CAPTAIN
OF HBM SHIP DRUID / AND SENIOR OFFICER IN THE CHINA SEAS /
DEPARTED THIS LIFE IN MACAO ROADS / 2ND JUNE 1840 / AGED 43
YEARS.”

チャーチルが名門出の埋葬者であるなら、続くナピア（Lord William John Napier, 1786-1834: Grave No. 164）もまた歴史に名前を残した人物である。英国海軍に入って活躍したあとで早々と引退し、スコットランドの貴族界の代表として英国貴族院の議員を勤めた。名門出身であったから、英国東印度会社の解体後に、英国政府の任命を受けて、中国貿易の監督官に就任する。1833 年から広東・マカオに居住することとなった。モリソン宣教師を日頃から敬愛しており、死後には故モリソンの墓の横に埋葬してほしい、と遺言を残していたことでも知られている。1834 年に 10 月 11 日に過労のために病死したあと、遺言通りに埋葬され、また現地の在住英国商人の献金によって、円柱形の大理石墓碑も建立された。ところが、帰国することになった未亡人の希望によって、遺体を掘り返して英国へ持ち帰ることとなり、前出ジェームス・マセソンがその一切を取り仕切った。その際に、円柱形の墓碑も取り除かれたのであるが、行方知らずのこの墓碑が、百年余り経過した 1953 年になって、香港の土砂工場で偶然発見された。細かく砕いてコンクリートに混入するつもりで、ながく工場内部に転がっていたものらしい。遺体はないものの、かつて一度は新教徒墓地に埋葬された経緯もあるところから、ここに墓碑を再び持ちかえることも検討されたけれど、結局、現在では香港の植民地墓地（The Colonial Cemetery, Grave No. 430）に安置されている。従って、ライド卿夫妻の本には、墓地番号 164 として記しているものの、実際には墓碑は存在しておらず、Teixeira の本にも登録されていない（注 39）。

クロケット（John Crockett, 1786-1837: Grave No. 87）は、マカオ沖の Lintin Island に係留されていたアヘン荷揚げ船 Jane 号の船長として知られ、生前の巨万の富を象徴するかのように、四角い石柱の墓石は、この小さな墓地のなかに雄然と高く聳えている。墓石に嵌め込まれた墓碑は、ベルギー産の御影石にカルカットの専門墓石屋 Llewelyn's が、文字を刻んだものである。同様に見かけばかりが堂々たる墓石には、やはりアヘン商人のペイターソン（Andrew Paterson: Grave No. 82）、ターナー（Richard Turner: Grave No. 93）など数基が墓地内に点在する。すでに触れたビール（Thomas Beale）の墓石が、それほど栄華を誇っていないのは、マカオの悪徳裁判官に絡んだブラジル開発の非法取引に手を貸して、多額の負債を背負ったうえに溺死する、そんな薄幸の結末が関係しているのである。ときどき出没するというビールの幽霊話も、有名なマカオ夜話の一つであるし、英国人作家 Austin Coates は、マカオ小説『破戒の街』でビールの人生に題材を得て、マカオの暗い背景を巧みに演出している（注 40）。

日本開国以前の日本物語

マカオ新教徒墓地内の墓石には、実際に、「日本」(JAPAN ないし Japan)という文字が刻まれているものが数基発見できた。或いは文字に刻まれずとも、日本に渡航したり、渡航予定であったり、幕末日本との係わりの深い人物の墓石も見受けられる。ここでは古いものから順次扱ってみたいと思うので、日本開国以前と以後に章分けする。

ロバーツ (Edmund Roberts, 1784-1836: Grave No. 88) は、この小さな墓地に眠る米国人のなかで、歴史に残る最も有名な人物である。既出の相原良一は、「アメリカの極東進出」と題した一章において次のように述べている。

「一八三一年偶々スマトラに於いてアメリカ船員が殺害され、マサチューセッツ州セイラムの商船フレンドシップ号が掠奪を蒙った事件があったので、極東に於けるアメリカ業者の通商活動を保護する必要が一般に認められた。そこでアメリカ政府は極東諸国と外交関係を結ぶためエドモンド・ロバーツを特使として派遣した。彼は先づ支趾支那、シャム及びムスカットと条約を結び、更に日本へ向かう予定で一八三二年にアメリカ軍艦ピーコック号に搭乗し、一席のスクーナアを伴い喜望峰を経て極東に向かった。」(注 41)

シャムとムスカットに対する条約交渉に成功した特使は、一旦帰国したうえで、日本との交渉にあたるつもりであったが、1835 年 3 月に実際に再遠征の途についたものの、1836 年 5 月末に下船したマカオで、当時蔓延していたコレラにかかって死亡する。日本渡航を果たせなかったわけである。それから、同伴船の船長キャンプベル (Archibald Campbell: Grave No. 89) もロバーツに相前後して同じ病魔に襲われてしまい死亡するが、同じ墓地に二人並んで埋葬された(注 42)。二人の米国人は新教徒墓地に眠る「日本物語」の最も古い例と言える。

ピエロ (Jacques Pierot, 1812-1841: Grave No. 45) は、蘭国東印度会社に勤務する医師である。母国の園芸学会から独占輸入の許可を受けて、日本の種子や植物を輸入するために、1841 年 7 月 10 日に Middleburg 号の乗員となって、日本渡航についた。台湾の沖合まで来て台風に襲われるが、破損した船体修理のために投錨したマカオ沖で、同年 8 月 16 日に病死した。米国特使ロバーツと同様に、日本到着前に無念の客死を遂げてしまった次第である(注 43)。

エングル (Isaac E. Engle, c.1789-1844: Grave No. 73) は、米国商船 Valparaiso 号の船長であったが、1843 年 1 月に米国を出航し、途中で寄港したハワイでは日本人の漂流民二名を預かってマカオに向かう。1844 年 10 月 23 日、熱病のためにマカオで死亡した (注 44)。

ペリー提督来日に係わる墓碑

ペリー提督の日本遠征艦隊に参加した数々の軍艦からは、1849 年から 1852 年、1853 年、更に 1855 年から 1857 年にいたるまでに、約 10 名ほどの乗組員がこの墓地に埋葬されている。1849 年だけでも次の四人を数える。John P. Griffin (c.1814-1849: Grave No. 64) は、米国東印度洋艦隊の旗艦プリマス号の乗組員であったが、寄港中のマカオに於いてなんとマストから転落死した (注 45)。横浜山手外人墓地の第一号埋葬者となったウィリアムズもまた、停泊中のマストから落下して死亡したことを考え合わせるとき、船乗りにとって死はどこに待っているか分からないのである。同じ軍艦の仲間 (messmates) の献金によって墓碑が建立されているのは、他の死亡した艦隊乗組員の場合と同じである。

Valentine Swearlin (1822-1849: Grave No. 65) は、ドイツ系米国人として、やはりプリマス号に乗り込み、マカオで 1849 年 6 月 20 日に死亡した。同様に、John F. Brooke (1790-1849: Grave No. 68) も、米国艦隊の軍医でありながら、1849 年 10 月 17 日にマカオで死亡した (注 46)。

Thomas A. Denson (1828-1852: Grave No. 5) は、中国沿岸に配備されていた米国軍艦サラトラ号の乗組員であったが、1852 年 8 月 31 日に死亡。また、Daniel Cushman (1828-1852: Grave No. 7) は、1820 年メイフラワー号で米国に渡った名家一族の一人であったが、米国軍艦サスヘハンナ号に乗り組み、恐らく香港で 1852 年 5 月 22 日に死亡した後、マカオのこの墓地に運ばれて埋葬された (注 47)。

アダムス (Joseph Harod Adams, 1817-1853: Grave No. 38) は、一族から二人の大統領が誕生するほどのニューイングランドの名門に生まれている。ペリー艦隊の一隻ポーハタン号の船長として死亡したあと、マカオに遺体が運ばれて埋葬された (注 48)。立派な墓石の南側には、「日本」(Japan) の文字が次のように刻まれている。“ERECTED TO HIS MEMORY / BY HIS BROTHER OFFICERS / OF THE EAST INDIA AND

Japan Squadron.”

1855 年にはポーハタン号から二人の埋葬者が出た。John Dinnen (1826-1855: Grave No. 17) と Washington F. Hickman (1821-1853: Grave No. 23) は、両者ともに日本遠征に成功しての帰路に寄港したマカオで死亡した(注 49)。

ウィリアムズ (John P. Williams, 1822-1857) は、前出のアダムスと同様に、墓碑に「日本」(JAPAN)という文字が刻まれている埋葬者である。ペリー艦隊の乗組員であるばかりか、日本初の電信装置のデモンストレーションに協力した技師というように、墓碑はこう記している。“HE ASSISTED IN SETTING UP THE FIRST MAGNETIC TELEGRAPH IN JAPAN IN 1854.”(注 50)

日本物語を語り伝える最後の墓石は、マーガソン (Henry Davies Margessonn, 1823-1869: Grave No. 165) のものである。横浜沖の穏やかな海上を航行中に、古い米国製の蒸気船が座礁して沈没。ハンガリー人のピアニスト等の乗客とともに溺死したらしい(注 51)。“WHO WAS DROWNED / BY THE LOSS OF THE STEAMER ‘HAYOMARU’ / NEAR YOKOHAMA, JAPAN”と墓碑プレートは記している。すでに時代は明治維新を迎えた 1869 年 6 月 17 日のことである。

日本を脱出したあとにマカオで他界し埋葬されたキリシタンの「日本物語」から論を起し、モリソン夫人メアリーの死去を契機として新設されたマカオ新教徒墓地、そこに眠るモリソン一家を初めとする、日本との係わりのなかでマカオ周辺で死亡した欧米人の「日本物語」に論を進め、最後に、マーガソンの墓碑を発見した。他の「日本物語」に登場する埋葬者とちがい、日本海域で死亡した唯一の埋葬者である。時代も明治維新を迎えている中で起きた新しい「日本物語」の異変と言える。

墓碑だけをたよりにこうして「日本物語」から「日本物語」へとマカオの歴史を幕末維新まで辿ってみると、国際交流の流れは、西洋から東洋に、東洋から西洋に向かって、マカオの小さな半島で融合している動きが垣間見れる。その後第二次世界大戦の間、中立国の立場を守ったマカオでは、相互に接近する「日本物語」と「日本物語」が、やがて一つの物語を織りなすことになる。この国際化の過程を解明することが今後の課題として残っている。

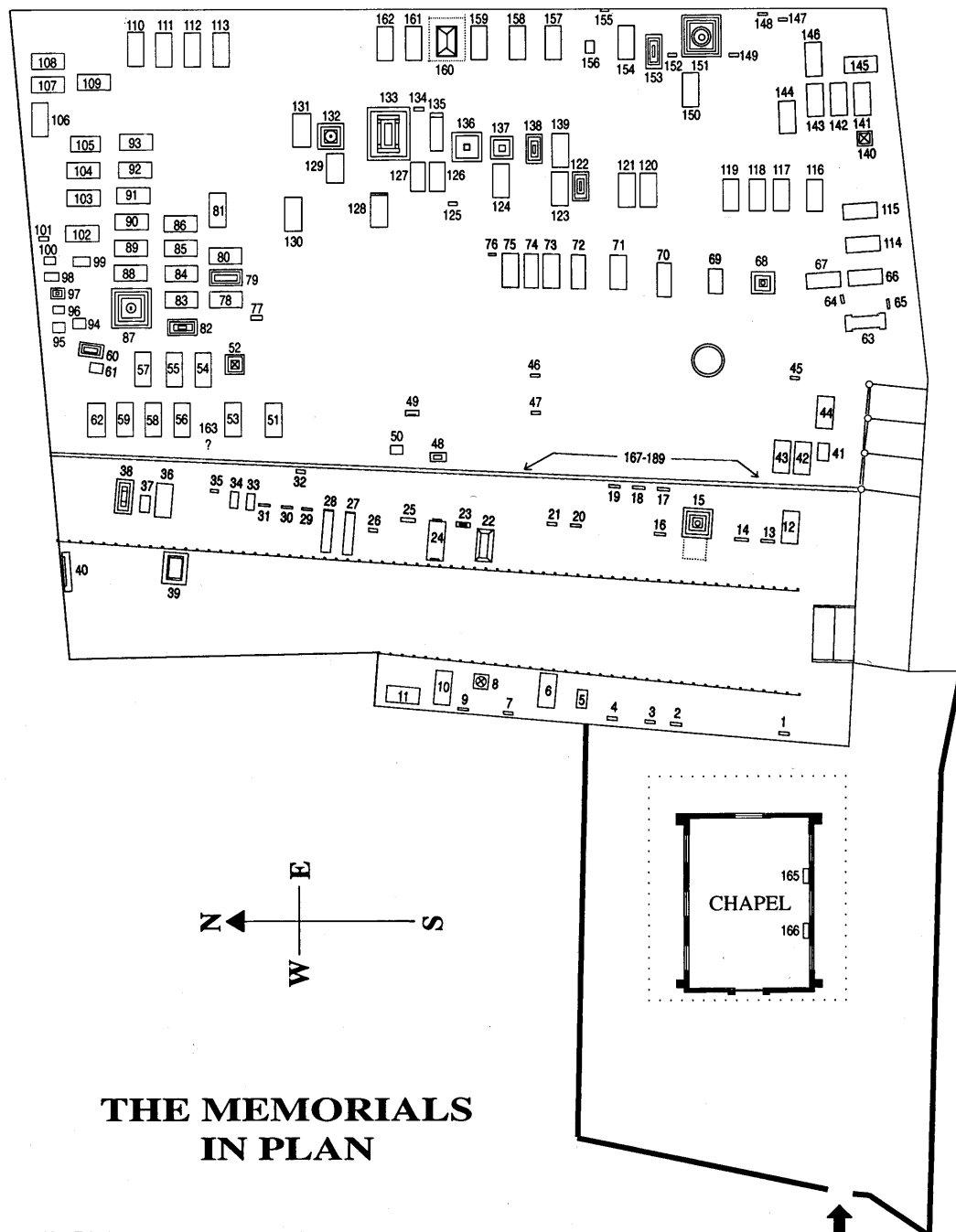
注

- (1) "Review of Culture," No. 17 (2nd Series), October/December, 1993, ICM.
- (2) Ibidem, op. cit., Manuel Teixeira, 'The Japanese in Macau', pp.154-72.
- (3) Fr. Manuel Teixeira, "The Japanese in Macau", pp.62, 1990, ICM.
- (4) Ibidem, op. cit., Teixeira, p.154.
- (5) Ibidem, op. cit., p.165.
- (6) Ibidem, op. cit., p.170.
- (7) Ibidem, op. cit., p.157.
- (8) Ibidem, op. cit., p.161.
- (9) Ibidem, op. cit., p.161.
- (10) Lindsay & Mary Ride, AN EAST INDIA COMPANY CEMETERY - PROTESTANT BURIALS IN MACAO (H.K. Univ. Press, 1996).
- (11) Ibidem, op. cit., pp.14-6. See also Austin Coates, MACAO AND THE BRITISH 1863-1842 (Oxford Univ. Press, H.K., 1988).
- (12) 拙稿「アヘン戦争前夜のマカオに於ける英人居住に関する一考察」『埼玉女子短期大学研究紀要』第11号、2000年3月、p.107.
- (13) Alexander Michie, THE ENGLISHMAN IN CHINA (Blackwood, London, 1900). Vol.1, pp.287-95.
- (14) Jean Crouch-Smith and others, MACAU PROTESTANT CHAPEL, A SHORT HISTORY (Funcacao Oriente, Macau, 1996). p.17.
- (15) 相原良一『天保八年 米船モリソン号渡来の研究』（野人社、昭和29年）p.25.
- (16) MEMORIES OF THE LIFE AND LABOURS OF ROBERT MORRISON, compiled by his widow (Longman, Orme, Brown, Green and Longmans, London, 1839). Vol.1, pp.152-3.
- (17) Ibidem, op. cit., pp.160-1.
- (18) Ibidem, op. cit., p.180.
- (19) Lindsay & Mary Ride, op. cit., p.235.
- (20) RAYMEN'S NOTES ON RECORDING MONUMENTAL INSCRIPTIONS, revised by Penelope Pattinson (4th edition, Federation of Early History Society, Birmingham, 1992). p.26.
- (21) Ibidem, op. cit., p.19.
- (22) 鄧開頌『澳門歷史（1840 - 1949）』（珠海出版、1995年）p.440.
- (23) Lindsay & Mary Ride, op. cit., p.234.
- (24) Ibidem, op. cit., pp.60-2. See also William John Townsend, ROBERT MORRISON THE PIONEER OF CHINESE MISSIONS (London Missionary Society's Edition, Partridge, London, n.d., but c. 1890). p.142.
- (25) MEMOIRES OF THE LIFE AND LABOURS OF ROBERT MORRISON, vol. 2, pp.101-2.
- (26) Ibidem, op. cit., pp.105-6.
- (27) The British Lichen Society: Conservation Committee. The Secretary, Department of Botany,

Natural History Museum, Cromwell Road, London SW 7 5BD.

- (28) Judi Culbertson & Tom Randall, *PERMANENT PARISHIONS* (Robson Books, London, 19865).
- (29) J.M. Braga, *TOMBSTONES IN THE ENGLISH CEMETERIES AT MACAO* (Macao Economic Services Department, 1940).
- (30) Lindsay Ride, *THE OLD PROTESTANT CEMETERY IN MACAO* (The Royal Asiatic Society Hong Kong Branch, 1963).
- (31) Manuel Teixeira, *THE PROTESTANT CEMETERIES OF MACAU* (Direccao dos Servicos de Turismo de Macau, 1985).
- (32) Lindsay & Mary Ride, op. cit.
- (33) Colin D. Rogers, *THE FAMILY TREE DETECTIVE* (Manchester Univ. Press, 1997). pp.196-7.
'and it seemed as if the morning of the Resurrection had come and the sleepers had risen from their graves and were standing upon their feet silent and solemn, all looking toward the East to meet the Rising of the Sun," p.197.
- (34) Ibidem, op. cit., pp.120-2.
- (35) Luis Van de Camoens, *THE ILUSIADS*, translated by William C. Atkinson (Penguin Books, U.K., 1952).
- (36) Anders Ljungstedt, *AN HISTORICAL SKETCH OF THE PORTUGUESE SETTLEMENT IN CHINA* (J. Monroe, Boston, 1836), reprinted by the Oxford Univ. Press, H.K. as well.
- (37) Lindsay & Mary Ride, op. cit., pp.142-3.
- (38) Ibidem, op. cit., pp.215-6.
- (39) Ibidem, op. cit., pp.259-262.
- (40) William C. Hunter, "A True Ghost Story," pp.95-99, in Donald Pittis and Susan J. Henders ed. *MACAO: MYSTERIOUS DECAY AND ROMANCE* (Oxford Univ. Press, H.K.).
- (41) 相原良一, op. cit., p.23.
- (42) Lindsay & Mary Ride, op. cit., pp.168-70.
- (43) Ibidem, op. cit., p.45.
- (44) Ibidem, op. cit., p.73.
- (45) Ibidem, op. cit., p.147.
- (46) Ibidem, op. cit., p.83.
- (47) Ibidem, op. cit., p.85.
- (48) Ibidem, op. cit., p.117.
- (49) Ibidem, op. cit., pp.94-5.
- (50) Ibidem, op. cit., p.101.
- (51) Ibidem, op. cit., p.263.

Appendix 1. The Memorials in Plan after Teixeira (Lindsay & Mary Ride, AN EAST INDIAN COMPANY CEMETERY PROTESTANT BURIALS IN MACAO, Hong Kong Univ. Press, 1996, p.70)



Appendix 2. Account Statement dated Macao 30 June 1840, of Jardine Matheson & Co. to Dr. Hollingworth Magniac (private collection)

Dr. Hollingworth Magniac Dr. in acc ^t with Jardine Matheson & Co.	
1839	1839
June 15 th 36 4 Quarterly payments by Magniac	July 1 By Balance of acc ^t to Dr. Credit balance \$ 70.08:21
Sept 15 th 232.00:00 from 1 st July 1839.	1839
to 30 th June 1840. now changed to 1 st July 1840.	June 30 By 12 months interest at 7 1/2% \$ 4.902:66
more average rate for a while at first 6%	By 5 1/2% not on \$ 4285:71 137:45
Interest. 4.10:00. 24.8.	4705:21.
June 30 12 months payments to Dr. Paid	
Balance at Macao 28 th June.	
to Dr. Balance in hand -	
\$ 74803:21	
1840	1839
June 15 th 36 4 Quarterly payments by Magniac	July 1 By Balance of acc ^t to Dr. Credit -
Sept 15 th 232.00:00 from 1 st July 1840 to 30 th June	1840
1841. now changed to 1 st July 1840 to 30 th June.	June 30 By 12 months interest at 7 1/2% \$ 4.915:22
Interest. Paid at Macao 28 th June. 34.05:79	By 5 1/2% not on \$ 4057:79 130:43
June 30 12 months payments to Dr. Paid	
Balance at Macao 28 th June. 30.00:00	
to Dr. Balance in hand -	
\$ 71092:25	
\$ 75400:04	
1840	
June 30 By dividend of Canton Insurance Co.	
Balance 152:25 in share - 450:75	
\$ 75400:04	
1840	
June 30 By dividend of Canton Insurance Co.	
Balance 152:25 in share - 450:75	
\$ 75400:04	

Received 30th June 1840.
J. E.
Jardine Matheson & Co.